

「子どものケアに携わるみなさまへ」

水澤 都加佐

(Healing & Recovery Institute 所長)

子どもが健康に成長するためには、いくつかの大切な要素があります。まず、食べ物や衣服、生活の場である住居、そして必要な医療を与えられることです。これらは、生きるために必須な要素です。それと共に、子どもが育つ場、家庭であれ施設であれどこであっても、安全性・安心感が不可欠です。生活している中で日常的に行っていることは、食事をする、話す、お風呂に入る、テレビを観る、寝る、と言った、誰でも普通に行っているごく当たり前のことですが、こうしたことが可能なのは、生活する場に安心感、安全性がなければ行えないのです。さらに、子どもは発達途上にいます。大人ではありません。することなすことに間違いがあっても普通です。それを正すのは育児であり教育ですが、子どものとった行動を正しても、その子どもの存在を否定しないことが大切です。子どもにパワーを与えることもまた必要です。子どもは小さく、一人で生活が可能になるまで20年近くかかります。その間、養育者（親とは限りませんが）、子どもに生きる力、パワーを与える必要があります。それには、子どもを褒め、知識や知恵を与え、教育する必要があります。しかし残念なことに、せつかくいろいろな人とのつながりの中で蓄積した子どものパワーを奪う養育者がいるのも事実です。奪う方は様々ですが、暴力、暴言、存在を否定する言葉、狭小な価値観、いつもよその子と比較する、親の期待通りに育てようとするなどは、子どものパワーを奪います。また、子どものネガティブな感情を受け止め、聞いてあげる必要があります。寂しい、悲しい、腹が立つといった感情や、時には自己否定感、無力感、みすてられ不安などと言ったネガティブな感情をそのまま受け止め、話を聞いてあげることが大切です。しかし、子どもが泣いていると、いつまで泣いているんだ、男だろう、強く生きなさいと言ったり、世の中には、もっと大変な人がいるんだ、時間がたてば忘れる、などと言って、子どもの感情を抑圧してしまう人たちがたくさんいます。抑圧されたネガティブな感情はいずれ蓄積され、生きにくさの根源になりえます。そうした蓄積されたネガティブな感情をアルコールや薬物で癒したり、ゲームやギャンブルにのめりこむことによって癒すことは、気を付けないといつか依存症にまで発展する可能性があるでしょう。

大切なことは、子どもたちの話をよく聞くことです。言いくるめ上手や説得上手になるのではなく、聞き上手になることが求められます。依存症者がミ

ーティングで回復していくのは、黙って聞いてくれる仲間がいるからです。誰かの発言を分析したり論評しないで、黙って聞いてくれる仲間がいる、その中で依存症者は癒され、自らの人生を見つめなおし、自分の人生という物語を自分で描きかえていくのです。

日本では、依存症者がいる家庭で育つ子どもや、機能不全な家庭にいる子どもたちを援助する専門家がほとんどいません。そうした子どもたちがいつか専門家と言われる人たちの前に現れるのは、子ども自身が何か問題を起こして、いわゆる「事例化」したときに初めて援助が受けられます。そしてそうした子どもたちは「問題児」と言われ、家族は「問題家族」と呼ばれます。実は、問題は、依存症であったり、機能不全という問題なのですが。

ACと言ったり、アダルトチャイルドという言葉がありますが、子どもたちの置かれている状況をいち早く察知して、子どもたちが事例化する前に援助の手を差し伸べる必要があります。どのようなすばらしい相談機関やクリニック、病院があっても、なぜ子どもたちが事例化するかアダルトになり自ら生きにくさを自覚するまで何もしないで待っていなければいけないのでしょうか。今現在、子どもたちに何らかの援助をしたり治療をする方々の前に現れる以前の働きかけを、これからもっと積極的に展開しなければならないのではないのでしょうか。